

e

経済学が
もっと
面白くなる

C

情報&メッセージ!

O

北海学園大学
経済学部
2006
エコノNo.14

n.

特集

これが、経済学部2部(夜間部)ライフだ!

学業と仕事で、一日をフル活用! 今しかできないことを、今やる。

北海学園大学経済学部には、夜に受講が可能な2部が設置されており、アルバイトをしながらの通学、社会人学生、ダブルスクールなど、キャリアも年齢もさまざまな学生が在籍しています。夜に大学に通う生活とは? 二人の学生に登場いただき、その様子やライフスタイルについて伺いました。

医療から経済学の分野へ。
知りたいことが、
まだまだいっぱいある。

笠井 真利子さん(稚内高校出身)
経済学部・地域経済学科2年

看護師としてキャリアを持ち、現在は、看護師を育成する看護学校の教官として多忙な日々を送る笠井さん。日常の仕事でこなすだけでも大変な労力だが、笠井さんの向学心はそれを上回る。「時間は、自分で作るもの」という考えで、本学部2部への入学を決めた。「看護学校では、成人看護学の分野を担当しているのですが、成人の疾病は社会の動きや仕事と深い関係があります。医療の経験しかなかったので、もっと社会の仕組みや理論など幅広い知識を身につけて、指導にあたりたい。でも、学んでいくうちに、好奇心がどんどん広がってきますね」。

昼は、看護学校で指導にあたり、夜は学生として勉学に励む笠井さんの超ハードな日常とは?

アルバイトと講義、資格取得。
いまのライフスタイルが
とても気に入ってます。

高橋 和也さん(札幌新川高校出身)
経済学部・地域経済学科3年

昼間は週4日ほどアルバイトをこなし、夕方から大学で講義を受けるというスタイルで3年目を迎えた高橋さん。「いまのライフスタイルが、とても気に入っています」と感想を話す。高橋さんは、大学受験のとき、いろいろな道を探っていたが、調べていく中で注目したのが本学部の2部の存在。「もともと経済学志望だったのですが、早くから社会を知りたい、自活したいという思いもありました。そしてなにより、1部の学科と同じ内容の講義で、学費が約半分ですむというのが大きな魅力でした」。

高橋さんは、将来の希望の一つに「教師」があり、資格取得を目標に1年のときから教職課程のカリキュラムも履修。そんな、ぎっしりと充実した高橋さんのライフスタイルとは?

経済学部2部は

- 授業内容は1部と同じ
- 学費は1部の半額
- 社会人には特別入試もあり(下記参照)

授業は月～土 17:50～21:00 校舎は地下鉄駅直結

2007年度経済学部2部 社会人特別入試 学費

第I期	出願期間	2006年11月1日～11月13日
	試験日	2006年11月26日(日)
第II期	出願期間	2007年2月19日～2月28日
	試験日	2007年3月3日(土)
	試験科目	書類審査・面接



	1部	2部
入学金	200,000円	100,000円
学費(年額)	982,000円	490,000円



看護学校で教え、 大学で教えらる。

立場が違うダブルスクール。

笠井 真利子さんの場合



特集 これが、 経済学部2部 ライフだ!

一週間の平均的なスケジュール

	AM	PM	1講目	2講目
月	病院(実習引率)	病院(実習引率)	北海道経済論	国際関係論
火	病院(実習引率)	学校(講義)	情報処理論	環境経済論
水	病院(実習引率)	学校(会議等)	経済地理学	開発政策論
木	学校(講義)	病院(実習引率)	経済政策	日本経済史
金	病院(実習引率)	病院(実習引率)	心理学	地域経済論
土	学校又は休み		地域科学	コミュニケーション論I

過密スケジュールには、 健康と体力が基本。



昼間は看護学校の教官としての日々を送る笠井さんの一日は、超過密スケジュール。5時半に起床して朝食を摂り、7時半には家を出る。学校へ到着してから始業時間までが、朝の集中タイム。その日の指導内容のチェックや準備、大学の授業の予習や

復習に全神経を注ぎ込む。授業は、普通、朝の8時半から夕方5時までで、内容も教室での講義から病院での実習指導など多岐にわたり、場所もいろいろ。終業と同時に大学へ向かい、17時50分から21時までが本学での授業となる。

「こんな生活ですから、健康と体力がまず基本。食事と睡眠には、今まで以上に気を使うようになりました。夕食の時間があまり取れないので、朝食とお昼は、特にしっかりと食べるようになりました。1年以上続けてきて、過密な生活ですが、何となくリズムが分かってきて、私には合っているのかななんて、感じています。」

学業とアルバイトと自由時間と。 気に入りの生活サイクル。

現在、高橋さんのアルバイト先は、さまざまな酒類や飲料、食品などを扱う量販店。週に4日、午前9時から14時までがアルバイトに費やされる。

「かつては塾の先生をやっていたこともあります。あまり仕事を増やすとボクの場合、疲れてしまって勉強ができなくなってしまいます。仕事の後は、家に帰って休息をとったり、勉強をしてから、気分も改めて大学へ行くようにしています。」

時間が有効に使えるのは、2部の大きなメリット。高橋さんは、どちらかというと朝方タイプで、仕事のない日は起きてすぐに勉強し、その勢いで授業にでるといふ。

「これがなかなか集中できて、効果的なんです。夜、授業が終わった後の時間は、どちらかというと友人と会ったり、趣味の時間にしています。いま、この生活サイクルが、とても気に入ってます。」



一週間の平均的なスケジュール

	AM ~ PM	教職課程	1講目	2講目
月	自宅で勉強 11:00 ~ 13:30	社会福祉論 教育実習実践指導I	金融経済論	ゼミナールI
火	アルバイト	09:00 ~ 14:00	ロシア極東社会経済論	社会調査論
水	自宅で勉強or自由時間 11:00 ~ 14:00	総合演習A	会計学原理	金融システム論
木	アルバイト	09:00 ~ 14:00	簿記	発展途上国論
金	アルバイト	09:00 ~ 14:00	西洋経済史	協同組合組織論
土	アルバイト 09:00 ~ 14:00	教育史	経営学原理	韓国社会経済論

高橋 和也さんの場合

やりたいこと、夢があるから、

時間やお金をもっと 合理的に使いたい。





一日の平均的なスケジュール

- 05:30～起床
何事も健康が基本。しっかり朝食を摂り出勤の準備。
- 07:30～出勤
職場へは車で約30分。
- 08:30～始業
教室での講義、病院での実習補助など、毎日、超過密なスケジュール。
- 17:50～大学での講義
経済学の勉強に集中することが現在のリフレッシュタイム。
- 21:00～終業
明日のために直帰が基本。
- 21:30～帰宅
夕食はあっさりとするし、明日の準備を。
- 22:30～就寝
十分な睡眠を摂ることも心がけている。



ふと考えたら、世の中いっただいどうなっているんだろうと。

笠井さんが本学部入学を決意した大きな理由は、持ち前の好奇心と向学心に突き動かされて。「同じ職場に、私と同じように本学部を卒業した先輩が数人いて、学び続けることの大切さと楽しさを身近にお聞きし、肌で感じていました。それなりに毎日が忙しかったのですが、周りの人にも協力していただき、今しかない決意しました」

笠井さんがいまいちばん興味を持っているのが地域の経済状況について。「地域経済の空洞化現象や北海道の食料生産の実情など、今まで漠然としか感じていなかったものが具体的に論理的に理解できる。そんなことを知ることで、今まで生活してきた、知っているつもりで何も知らなかったんだなあ、と痛感します。大学の講義って、それだけ私には刺激的なんです」。

看護の研究論文も経済学的手法で。

社会人学生生活2年目を迎え、大学で受ける講義内容もますます専門的になり、課題も多くなってきた。「授業内容が専門的になってきたのはもちろんですが、提出しなければならないレポートなども増え、いろいろ調べたり、それを理論立てて作成するのは大変です。でも同時に、頭の中の整理の方法や組み立て方などの訓練にもなり、とても興味深い作業です。仕事上でも、看護の研究論文などを書く機会があるのですが、以前より系統立てて理論的にまとめられるようになってきたかな、と内心、充実感を覚えています」。

ハードなスケジュールのなかで、すべて前向きに取り組み、着々と成果を上げている笠井さん。その姿から、学ぶことの楽しさが伝わってくる。

社会人になって広がった好奇心の理想的な受け皿

2部には、さまざまな仕事を持ち、年齢が違う人が通う。社会人にとっては、職場では得られない交流ができた、新鮮な情報が得られたり、そんな評価を口にする学生も多い。「交流では、時間的に余裕がないのがちょっと残念。でも、周りの人も目的意識がハッキリしているので、勉強しようという意志が強く、教授たちともアットホームな雰囲気です。そんなのがとてもいいですね。今は、趣味を持つ時間もあまりないのですが、私にとって、大学での時間が自分をリフレッシュしてくれているようです」。

経済のさまざまな側面を学びながら、それを医療分野に関連づけて考えていきたいという笠井さん。「私の場合、社会人になって知りたいこと、学びたいことがどんどん増えてきて興味が尽きません。そんな人にとって、経済学部2部は、最適な環境だと思います。とにかくあと2年、卒業まで頑張ります」。



一日の平均的なスケジュール

- 08:00～起床
どちらかというと朝型人間。
バイトのない日は朝に集中して学習。
- 09:00～アルバイト(週4日平均)
今のバイト先は約1年半のキャリア。
商品知識も豊富。
- 14:30～一時帰宅(昼食・自宅学習など)
講義に出る前に自宅でリフレッシュ。
- 17:50～大学での講義開始
経済を身近に感じる充実した講義が目白押し。
- 21:00～終業
休日の前などは、終業後、大いに友だちと交流。
- 22:00～帰宅
通学は、地下鉄を利用。大学は駅直結なので便利。
- 24:00～就寝
今日もおつかれさま！



具体的な目標を持ち、自然体で確実に向かっていく。

将来の希望の一つに「教師」を考えている高橋さん。それを実現しようと一年次から教職課程科目を履修している。開講は、時には平日の昼時間や土曜日になることもあり、そんな意味でもわりと時間の融通が利くいまのサイクルが高橋さんにとってはベスト。

「高校の時から、将来やりたいことがいっぱいあって。語学の専門家とか、美容師とか、音楽家とか。その一つに教師がありました。でも、学校の先生になって生徒たちにものを教えるには、ある程度の社会経験があったほうがいいと思います。可能であれば、卒業後、民間企業に就職し、その後に教師になればいいですね。また同時に、大好きな音楽で一曲当てたいという夢も捨てていません。今は、いろんなことに関心があって、あれもこれもやりたいという感じでしょか」。

大学の講義は期待以上。実力を磨くゼミ活動。

1部の講義内容と、同じものが展開される2部の授業。高橋さんの感想は、大学の講義は、期待以上に充実しているという。「印象的な授業が多いですね。“経済学入門Ⅱ”では、今まで抽象的に感じていた経済が、具体的に分かり感動しました。再生産などの計算が面白かったです。“地域経済論”で自分の生まれたマチを、多角的に調べたり、北海道の発展の歴史が講義された“北海道経済論”などでも、ニシン漁の話題がでたりで、経済学って本当に身近なものなんだなあ実感しました。語学ではこれから絶対に必要と感じ“韓国朝鮮語”を履修しましたが、先生の教え方が面白く、楽しく勉強できました」。

3年になり、本格的なゼミ活動も始まり、発表に必要なレジュメやレポート作成も増えてきた。「ゼミでは人数が少ない分、発表の機会が回ってくるサイクルが早い。図書館で資料を調べたり、大変ですが、それだけ知識や実力が付いていると実感しています」。

時間的にも経済的にもさまざまな方法がある。

将来のさまざまな可能性を模索している高橋さん。そのためにも、大学卒業は、不可欠な条件と考えていた。「生活の時間を有効に使いたいと思うなら、2部はおすすめ。周りの人も勉強しようという意志が強く、そういう雰囲気が濃いと思います。人数が少ないため落ち着いて授業を受けられることも、その一因かもしれません。1部の授業と同じ内容で、しかも学費は1部の半額。勉強したくても私立大学は経済的に苦しいからと、進学をためらっている人にも、おすすめです。何か目標がある人、時間的にも、経済的にも、4年間を有効に使いたい人、ぜひ、有意義に活用してほしいと思います」。



ゼミ対抗ソフトボール大会開催!

毎年恒例となっているゼミナール対抗ソフトボール大会が、経済学部ゼミナール協議会の主催によって6月20～23日に月寒公園坂下グラウンドで開催されました。経済学部ゼミナール協議会(略して経ゼミ協)は、研究や課外活動などの企画・運営を通して学生どうしの研究・交流をサポートする、学生手作りの団体です。経ゼミ協は、全国の大学の経済・経営・商学系の学部にも多くあります。全国規模の経ゼミ協は、ゼミの研究成果を発表する地域および全国大会を毎年主催していて、本学経済学部のいくつかのゼミもこの大会に参加しています。

さて、今回のソフトボール大会は、なんと総勢64ゼミが集まりました。というのも、経済学部には少人数のゼミ講義が1年から4年まで設

置されており、そのすべてのゼミが参加できるからです。1年生は基礎ゼミに必ず所属していますし、2から4年生のほとんどは自分の希望するゼミで活動しています。このソフトボール大会はゼミ活動をさらに盛り上げるために開催されています。実際、毎年多くのゼミが参加して、ゼミ生どうしが親交をさらに深め、また他ゼミと交流する良い機会となっています。

64ゼミの頂点に立つためには計6回もの試合に勝たなければなりません!! その栄えある決勝戦は、北倉ゼミ対川村ゼミの間で行われ、最終回に川村ゼミのサヨナラ満塁のチャンスを守りきって北倉ゼミが3対2で優勝しました。優勝したゼミには、優勝賞品が送られました。北倉ゼミ、優勝おめでとう!!!



私の履歴書

北倉 公彦 経済学部 地域経済学科教授 [きたくら ただひこ]



経歴	1944年	札幌市に生まれる
	1963年	札幌西高等学校卒業
	1967年	帯広畜産大学酪農学科卒業
	1969年	北海道大学大学院農学研究科修士課程修了 北海道大学大学院農学研究科博士課程中退 帯広畜産大学助手、北海道開発局勤務
	1998年	北海道開発局退職、(社)北海道地域農業研究所研究参与
	1999年	酪農学園大学環境システム学部教授
	2000年	北海学園大学経済学部教授 現在に至る

主な研究業績

- 『農業基盤整備と地域農業』1991年、明文書房(共著)
- 『地域農業の活性化と展開戦略』1994年、明文書房(共著)
- 『北海道酪農の発展と公的投資』2000年、筑波書房
- 『農業の与件変化と対応策』2002年、農林統計協会(共著)
- 北海学園大学『経済論集』、『開発論集』では「根釧パイロットファームにおける営農上の諸問題発生背景(2002年)」、「北海道の畑作地帯における農地の分散要因と集団化の制約要因(2003年)」など



牧場経営を夢見ていた頃の学生時代

夢の実現に向けて

高校時代の私の夢は、牧場を経営することでした。クラスメートにも公言していたし卒業文集にも書きました。そこで、牧草づくりから牛飼いまで幅広く勉強できる帯広畜産大学酪農学科に迷わず入学しました。大学では獣医、飼料作物、家畜管理、農業機械、乳製品製造、酪農経営までめいっばい履修しました。解剖実習などは後で肉が食べられるので楽しみでした。

農業経済学を学ぶことになったわけ

そんな私に転機が訪れました。東京でオリンピックが華やかに開かれた1964年、北海道は大冷害に見舞われました。翌年、十勝地方の冷害対策に関する研究が畜産大学に依頼され、希望する学生に農家調査の機会が与えられました。

訪れた農家の子供達は、昼飯にイモやトウキビを食べていました。とても子供の前で持参したおにぎりを食べることができず、イモと交換する日が何日も続きました。

その調査を通じて、わずかしが離れていなくても農家によって被害の程度が大きく違うことに気がつきました。それは基本的な営農技術を励行しているか否かによるものであることがわかりました。そこで、伝統的な営農技術に最新の技術を加えて経営資源を有効に組み合わせ、収益を安定的にしかも最大にするための方策を探る農業経営学に強い関心をもつようになったのです。

大学院をめざして

勉強するうちに農業経済学の領域が非常に広く深いことを痛感させられました。そんなある日、私の先生は北大大学院への進学をすすめてくれました。

それ以来、大学院進学をめざしていた1年先輩の上級生と2人で、週2回の原書講読と経済数学の特訓が始まりました。先生から睡眠は最小限にせよといわれ、講義とアルバイト以外の時間は勉強にあてました。先生はよく自宅で夕食をご馳走してくれました。

大学院時代

北大では畜産大学の私の先生の恩師である矢島先生に師事しました。矢島先生は、畜産大学は「繋ぎ牛舎」だが、北大は「開放型牛舎」だといわれました。エサを与えてくれる方式ではなく、エサを食べたければ仲間の牛に負けずに自分で食べよ、というわけです。大学院には太田原先生や池田先生、河西先生が先輩におられました。マル経中心の北大で近経は少数でしたが、院生同士で研究会をもち、酒を飲んで議論をしたりソフトボールをしたり和気藹々とした研究環境でした。

「農家は我々の先生である」と教えられてきましたが、開発局や農業団体から委託された調査を手伝いながら、多くの農家調査をすることができました。

行政官に

またまた私に転機が訪れました。博士課程に進学して間もなく、

恩師に誘われ帯広畜産大学の助手になりましたが、そこも大学紛争で荒れていました。そんなとき開発局から、欠員が生じたので農業基盤整備の調査計画をやってみないかと誘われ、いずれ大学に戻るつもりで気楽に引き受けました。上級試験に合格していましたし、自分の力で具体化できることに魅力を感じたからです。

開発局・開発庁で

仕事は、開発建設部が行う農業基盤整備の調査計画を指導し、開発庁や農林水産省と調査結果や計画案について協議することでした。年間100日以上も道内と東京に出張する年が続きました。おかげで全道をくまなく回ることができました。

北海道総合開発計画づくりも数度担当しました。JICAの専門家としてフィリピンやアルジェリアの農業開発プロジェクトへの参加や、デンマーク・オランダ・ドイツで政策研究する機会にも恵まれました。

また、ガット・ウルグアイラウンドの最終段階を迎えた頃は、情報収集と対応策の検討という特命を受けました。トップシークレット情報のほか、民間会社情報、各通信社の配信記事などから決着のゆくえを想定し、北海道農業への影響を予測して対応策を考え、大臣(北海道開発庁長官)や道内選出国會議員にレクチャーするのです。この仕事は農産物貿易を考える上で非常に勉強になりました。

再び研究者をめざしてから

40歳代後半にさしかかり、研究生活に戻りたくりましたが、当時、北大には社会人が大学院に入学する道はありませんでした。そこで、勤務をしながら博士論文の作成にかかりました。

北海道酪農の発展過程に主題をしぼり、文献やデータの収集、整理を続け、その目途がついた頃、恩師に相談しました。ところが、博士課程を中退し行政官となった私には学位申請の資格がないと告げられました。それから数カ月後、消沈していた私に恩師は東京農業大学に道を開いてくれました。

結局、学位取得までに8年近くかかってしまいましたが、その間に開発局を退職し、民間の研究所と酪農学園大学を経て北海学園大学に勤務することになったわけです。

現在の研究テーマ

北海道を中心とした食料・農業・農村政策に関する実証的な研究と平行して、中国における経済と農業に関する研究もしています。

学生諸君へ

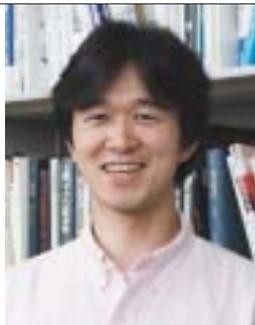
ものごとには表と裏、光が当たっているところがあれば必ず陰の部分があります。プラス面があれば必ずマイナス面があります。どちらか一方しか見なければ、本当のことはわかりません。現実を観念的にとらえず、立体的にみてほしいと思います。

また、批判をするだけでなく、その対応策も考えてみてください。その答は一つではありません。前提条件を変えながら多くの代替案を考えていくことを心がけてください。

気軽に声をかけてください。そして、教室では帽子をとりましょう。

研 究 室 の 窓 か ら

なぜ豊かな国と 貧しい国が 存在するのか？



逸見 宜義 | 経済学部経済学科講師
(へんみ のりよし)

そもそもですが…豊かな国って何が豊かなのですか？

経済学では一人当たりの国内総生産をもって一国の豊かさを把握します。国内総生産は一国内で生産から得られる所得の合計を示しており、つまり「一人当たりの国内総生産」は「一人当たりどれだけ稼ぐか」ということを示しています。というわけで、ここでの豊かさとは所得が大きいかどうかを意味しています。

それって重要ですか？

所得の大きさによって豊かさを測っているのであれば、“なぜ豊かな国と貧しい国が存在するのか？”は重要ではないと考える人もいられるかもしれません。だって一番重要なのは幸せかどうかですから。幸せってというのは、家族と一緒に笑って暮らせるか、今の仕事に誇りがもてるか、自然を見て心から感動できるか等々が重要なわけですし。ということは、一人当たりどれだけ稼げるかなんてどうでもいいことなのでしょうが？

実はどうでもいいことではないのです。途上国のデータを一目見れば、皆さんが当たり前と思って享受している事柄が経済的な豊かさの賜物であることが理解できるかと思えます(字が読める、きれいな水が飲める、80歳近くまで生きられるといったことは決して当たり前ではありません)。先ほど例に挙げた幸せも経済的な豊かさに支えられる部分が大きいのです。どうでもいい、または重要ではないと思われた方はもう少し現実を見ましょう。

では何が所得の違いを決定するのですか？

豊かさというやや曖昧ですが、豊かさを所得の大きさに置き換えてしまえば問題は極めてシンプルになります。同じだけ働いても生産できる量が少ないために所得も低くなってしまいます。一定時間あたりの生産量を経済学では生産性と呼びますが、では生産性は何によって決定するのでしょうか？生産性を決定する主な要因としては物的資本、人的資本、技術知識があります。例を挙げると、物的資本とは生産設備、技術知識は発明の水準、人的資本は持っている技術を生産に活かす能力などです。人的資本は教育であったり、また仕事をしながら技術を高めていくなどの方法により蓄積されます。以下では教育による人的資本についてより詳しく見ていきましょう。

途上国が直面する難しさ

生産性を高めるための一要素である技術知識を高めていくためにはより高い人的資本が必要です、生み出された技術知識

なぜ豊かな国と貧しい国が存在するのか？

これが私の研究テーマです

(というよりは、この問題への数ある取組みの中に

私の研究テーマが含まれるといったほうが正確ですが)

このような問題を考えるにあたって

どのようなアプローチが可能であるかを

今日は簡単に見ていきましょう。

を効率よく利用するためにも人的資本が必要です。具体例をあげると、初等教育を受けた人が家族にいるかどうか、品種改良された種を用いるかどうかに加え、さらにはどれだけ早く導入するかという点にも有意な影響を与えるということが解っています(より詳細な内容は、最も信頼の置ける学術専門誌の一つであるAmerican Economic Reviewに掲載された論文Foster and Rosenzweig (1996)を参照してください)。

したがって人的資本を高める要因の一つである教育の重要性は疑いのないものなのですが教育により人的資本を高める方法において途上国が直面する難しさが存在します。そのために世界には豊かな国と貧しい国が存在するので、途上国が直面する困難の例としては子供に教育を受けさせたくても、そもそも子供が学校に来ないということがあります。これは子供が家計を支える収入の一部分を担っているという現状から生じてしまいます。さらにこの事実は途上国における出生率を高め(途上国における高出生率は働き手としての需要からのみではなく死亡率が極めて高いという事実からも生じます)さらにこの高出生率は子供一人当たりの教育水準を押し下げます(十分な教育を行うためには子供の数自体が少なくなる必要があるのです)。

解決策は？

このように考察を進めていくと、児童労働を減少させる、出生率を減少させるといった目標が明確になってきます。問題は明らかになりましたが、これらの問題の解決もまた困難なものです。たとえば児童労働をなくすための取り組みとして、児童労働を用いた商品は購入しないという取り組みがありますが、そもそも製造過程を完全に把握できているのか、相対的に安全な職場を子供から奪うだけではないのかといった指摘もあります。本質的には親の収入だけで生活できれば問題ないわけですから、大人の労働市場の構造がどのようになっているのか、十分な賃金が確保される経済が確立しているのかといった点が次の問題となってくるでしょう。

理論的なアプローチの重要性

このように複雑に絡み合った経済問題を解決していくためには物事の繋がりを解きほぐし理解することが必要であり、そのために理論が存在します。経済問題は多くのインセンティブが絡み合っているため、ほんの一部を変えただけでも思わぬところに影響が波及するものです。理論的な考察を蔑ろにした政策提言はむしろ迷惑とさえいえるかもしれません。